

# ニューオーリンズと三宅島をつなぐ風

## ～災害に学ぶプロジェクトニュース4月30日号～

「おはようございます！」当たり前挨拶だけど、ちょっと眠い。14時間の時差と滞在2日目。疲れが出始める頃かもしれない。

さて今回は「変化」がキーワードだと思って参加している。今日、一つの言葉には2つの意味があることを感じさせられた。自分たちが変わる「変化」。アッシュ文化センターに集うパワフルでチャームな女性たち。ハリケーン・カトリーナ以降、仲間を元気づけるために活動を始めた。「変わらない」ことを自覚しているニューオーリンズ市役所の官僚。口をついて出た言葉は「官僚制度だから解るでしょう?」。日本もアメリカも官僚組織は動きが鈍い。

こんなことは、当たり前であって欲しくない。

(吉田)

### 明日に架ける橋

プロジェクトは順調に2日目を迎えた。

全ての参加メンバーはそれぞれの立場で、ニューオーリンズでの災害復興に向けて、誠実な活動を実践されている市民と交流しました。多くのことを学び、ともに深い気づきを得ようという意欲に満ち溢れていました。

2日目の午前中の訪問先はアーシェ文化芸術センター。建物は中心街から少し離れたややさびしさを感じる地域の大通り沿い。その活動拠点にお邪魔しました。

このセンターは、アフリカ系アメリカ人に対する敵対的イメージを改善するために設立された団体が源流。今から10年ほど前に開設されました。私たちとの交流会に参加して下さった7人のメンバー全員が女性。そして、一人の方を除き、全てアフリカ系アメリカ人のエネルギーで素敵な女性たちでした。

中でも事務局長を務めるキャロル・ビバルさんは、社会学と教育学を学んだ教養の高い方です。しかし、それだけではなく、人々の生活にコミットするなど、実践を積んだ素晴らしい人格者であり、活動者でした。

ニューオーリンズ市民でもある彼女から、災害の以前と以後に共通する地域の課題、災害後に発生した新たな課題についてレクチャーを受けました。日本側からは、日本各地で起こる災害について、特に、三宅島噴火災害の経過や市民としての支援経験について発表をしました。更に、市民団体間の連携の成果、市民と公的機関との連携・協働の経験まで意見交換することができました。どの話題でも、一貫し

て災害と人間の関係に焦点を当てた意見交換でした。

被災者体験は坂上さんを通じて語られ、三宅村行政責任者である平野村長から島民支援の様々な取り組みが伝えられました。訪米団のリーダーである青山氏は、これらを受け、全島避難時、東京都三宅島災害現地対策本部長だった経験に基づいて率直な思いを語りました。

深い信頼に包まれた交流の最後に、キャロル・ビバルさんはとても印象的にこう語ってくれました。「日本とアメリカにまた一つの新しい橋が築かれたことを嬉しく思います。困難な災害課題の取り組みを通じて、心からの人間と人間の分かち合いができたことを嬉しく思います」と。

ここに参加した日本側の全てのメンバーが同じ思いを持ち、この方々に出会えたことを感謝する気持ちで満たされ、今後の交流に更なる希望を与えていただいた。

(上原)

### ニューオーリンズ ショッキング日誌から

4月30日、ニューオーリンズ訪問2日目の朝を迎えた。今回の訪問目的は、日米交流プロジェクト「三宅島とニューオーリンズ・災害から学ぶ」。大きな大きなテーマだ。

今日の午後は、ニューオーリンズ市役所を訪問した。ニューオーリンズの復興支援における、計画、財政、福祉、住宅、運輸、交通などの担当者を変え、三宅島とニューオーリンズの災害の違いを越えて、被災者への対応、復旧、復興支援に行政としてどのように考え、計画し、実行したのかを互いに共有した。そこで先ず感じたのは、被災者に対する日米の政治的、政策的な認識の違いだ。

三宅島の被災者の場合、2000年9月2日から始まった全島避難で、東京到着時に提供された一時避難所は、代々木(東京都渋谷区)の国立オリンピック記念青少年総合センターであったが、一時的避難からすぐに空いている公営住宅が提供され、被災者は次々と公営住宅へと移動していった。これにより先ず肉体的、精神的なプライバシーが守られたことが、被災者・行政双方が多くの課題を乗り越え、長期避難生活に頑張れたことへの重要な条件であったと思う。そして被災後5年、ちょうどハリケーン・カトリーナがニューオーリンズを襲った2005年は、全島避難指示を解除し帰島した年であった。帰島後は、子供たちが通っていたあきるの市の学校の閉校式、帰島世帯の確認調査、東京アイランドシャトルの就航、アカコッコ館の再開、復興対策本部の設置、国交省と航空会社への航空路再開の要望、ボランティアセンター「風の家」の開所と、まさに行政と住民が一体となって大きく前進をしている時と重なる。「もやい」や「共助」といった合言葉が通じる時期でもあった。

一方、ニューオーリンズの場合、今回の視察時期が被災からちょうど3年目である。今でも災害対策の基本中の基本である災害対応システムもなく、防災行政無線もない。いまだかつて水害の大きな要因の一



アーシェ文化芸術センターの駐車場にある壁は、芸術っぽく大きな壁画となっていた。阪神・淡路大震災時の長田区を思い出した訪米メンバーもいた

つとなった高潮に対する認識も薄い感がある。国民性や文化の違いかもしれないが、結局は何故にニューオーリンズがこのような状況であるのか、私は「そのことを理解できないこと」を理解できたとか、今のところ言いようがない。国情や歴史、政策も全て日本とは異なるが、それらをすべて無視して考えてみても、例えば住宅対策ひとつとっても共通する課題やテーマを見つけられないでいる。

早朝のニューオーリンズの町を走っていると、災害後の町の「表」と「裏」の姿に出会うことができる。美しく回復した観光都市の巨大なビル群の街並みの先には、災害が「ホームレスのテント村」の形で残っている。この人たちの生活を誰が支え、誰が責任を持つのか。世界の大国「米国」の連邦、州、市行政の頑張りに期待しながら、ジョギングを折り返した。(平野)

## 災害がこわすもの 新たに創造するもの

初日に続き2日目も快晴に恵まれました。昨日までの時差ボケも取れ、体調は万全。しかし、本日のスケジュールは昨日に続き十全。

今回のニューオーリンズにおける研修は全てバスで移動しています。バスの窓からは台風「カトリーナ」の傷あとがいまだに多く目にとまります。今日も当地の多くの関係者とお会いし災害についてお話を伺いましたが、私の心の中に常に存在していたことは、この街にも生協組合員がいたら、私たちは何ができたでしょうか？ということでした。

私は東京の生協の災害対策に関わる会議の議長をしていますが、ニューオーリンズに来て多くのことを学びました。その一つは、災害はハードな面を破壊するだけでなく、人やコミュニティをも破壊してしまうということです。しかし、破壊から再生への過程の中で、人々はまた多くのことに気づき、より良いコミュニティをつくることできるということも学びました。

災害は誰でもおそれますが、人々はどのような困難な中でも、互いに助け合い、支え合い、再び未来を目指して歩み始めることを、ここに来て、そして三宅島支援を通して、確信することができました。「愛と協同。」生協の理念は災害に対し、組合員や都民の暮らしと命を守るために強力な武器となり得ることを信じ、さらに災害対策を進めたいと決意をいたしました。

(佐藤)

## 4度目のニューオーリンズ

カトリーナによる被害が発生して以降、ニューオーリンズへの訪問は、今回が4度目となった。フランス植民地時代の面影を残すフレンチ・クォーター地区や、高層ビルが立ち並ぶビジネス街では、災害の傷跡は全くと言っていい程に無くなっている。一方で、アフリカ系アメリカ人が多く居住する地区などでは、崩壊した建物が放置されていたり、仮設住宅用のトレーラーハウスが庭先で使用されて続いていると、被災後2年半以上が経って、復旧活動にも地域によって差が生じており、復興プログラムが上手く機能していない地区が存在していることがわかる。

今回のプログラムにて訪問したコミュニティのリーダーの人々における、州政府や市役所の災害対策、復興政策に関する評価は、「相変わらず」厳しい。政治的な思惑や混乱、行政組織としての未熟さなどにより、様々な施策に遅れが出ていることは多くの人々が指摘するところである。しかし実際には、その様な問題はカトリーナ災害が発生する以前から、様々なかたちで存在していた。

### 【4月30日行程】

午前 アッシュ文化芸術センター見学  
事務局長キャロル・ピベル氏との意見交換  
午後 ニューオーリンズ市役所訪問  
市役所など21名の関係者との意見交換



バスの窓からでも被災地であることを強烈に印象付ける家屋入り口に記された軍による安否確認マーク

災害後のニューオーリンズでは、多くのNPOやNGOが様々な場面で活躍している。優秀な人材がニューオーリンズに移住し、革新的な政策を実行している。市役所などの行政組織にも、各種財団が自己資金で各分野の専門家と契約を結び、ニューオーリンズ市役所に派遣をしている事例がある。優秀な人材が安価に(多くの場合無償で)確保される一方、この状況には潜在的なリスクがある。彼ら専門家は、派遣元の財団との契約が終了すれば、市役所を去ってしまう。市役所内部における知識や技術の指導、継承が必要とされているのだが、この問題には余り関心が払われていないようである。都市計画同様に、同市における行政組織の運営にも長期的な展望が必要とされている。

(佐々木)



ジャズフェスティバル直前のニューオーリンズにスーツ姿は目立ちます……

### < 編集後記 >

街は昨日にもまして、ジャズフェスティバルを控えて行きかう人の表情はどこかウキウキしている気分が感じられます。今朝朝食をとった小さなカフェで、昨日訪問したホームレス支援に取り組む「マグノリア」で出会った男性が昨日と同じ帽子をかぶりエプロンをかけている姿を見かけました。昨日会った時の彼は、食事の時間に大勢で押しかけてしまった私たちに少し怪訝な顔を見せて、下をうつむきそそくさと食事を済ませていった。

朝食を済ませて店を後にした時、ちょうど彼も仕事を終えて自転車にまたがったところだった。「Good morning!」と声をかけると、少し驚いた様子を見せながら彼は「昨日会ったね」「覚えてるよ!」と少し笑顔を見せてくれた。この街の中で精一杯の社会参加をしている彼と、客としてこの町にいる私の暮らす場所は違う。そんな当たり前のことを改めて感じながら、一瞬の時間の中で目と目が合った視線を通じて、ただただ、「どうか元気で」と心をこめて伝えたいと思った朝の出来事でした。(坂上)